



出会いを大切に

緒方 大

宮崎大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学分野教授

後輩の皮膚科の先生方へ—私がいまの立場にいるのは、自身の努力だけで到達した結果というよりも、これまでに会ってきた人々から受けた影響の積み重ねによるものだと感じています。両親や姉、妻や娘、友人たち、そして飯塚病院、静岡がんセンター、埼玉医科大学、MDアンダーソンがんセンター、国立がん研究センターで出会った恩師や同僚たち——その1つ1つの出会いが私に刺激を与え、成長の方向を示してくれました。出会いそのものを選ぶことはできませんが、出会いの場へ自ら足を運ぶかどうかは、自分の意思で決めることができます。

この原稿は、チェコ・プラハで開催されたヨーロッパ皮膚癌学会の帰路で書いています。そこでは最先端の知識に触れるだけでなく、かつてフランス・リヨンでお世話になった先生や、アメリカ留学時代に同じ研究室にいた仲間との再会がありました。さらに、各地で日々皮膚がん診療に向き合っている医師たちとの新たな交流も生まれました。こうした再会や新しいつながりが、自分の視野を広げ、次の一步を踏み出す原動力になるのだと改めて実感しています。

一方で、私たちを取り巻く環境は大きく変わりました。デジタル化の進展により、必要な情報は瞬時に手に入り、AIが周辺知識まで補ってくれる時代

です。人に会わずとも、多くのことを知識として獲得できるようになりました。また、医療現場では働き方や経営の変化も進み、学会参加の機会が制限される場面も増えています(現在私が勤務している大学病院では経営改善を目的とした診療日変更として木曜日を休診日とし、土曜日を平日と同じように稼働させる、といった改革が行われています)。そうした状況の中で、「わざわざ外に出る必要はあるのか?」と覚めることもあるかもしれません。

それでもなお、私は若い先生方にこそ、積極的に外へ出て、人と出会う経験を重ねてほしいと考えています。直接顔を合わせることでしか伝わらない熱量や価値観があります。言葉の端々から感じる熱量や、研究や診療に対する姿勢は、実際に人と関わることで初めて実感できるものです。その中で、自分が本当に取り組みたいものは何かを見きわめ、それを自分の血肉としていく過程こそが、医師としての厚みを形づくりま

す。出会いは偶然のようでいて、行動によって引き寄せられるものでもあります。だからこそ、知的好奇心が旺盛なうちに、自ら動き、多くの人と交わってみてください。その1つ1つの出会いが、やがて自分自身の進む道を照らす確かな光になるはず